

内観 ニュース

第 3 2 号

発行所

日本内観学会

〒702-8508

岡山市浦安本町100-2

慈恵病院

壮年期を迎えての日本内観学会の課題



日本内観学会理事長 巽 信夫

当会も創設31年目を迎え、人間でいえば、青年期から壮年期に向かう過渡期にあるといえます。この節目には、同時に新たな課題も待ち受けているようです。

そこでこの機会に、「組織活動自体の再点検」、及び、「今後の方向性」といった点に絞り、私見を述べさせていただきます。

まず、第一のテーマにまつわり、吉本師自身は、当会創設に当初大変消極的であったとうかがっています。組織活動自体に内在する様々な束縛が、我執からの解放を妨げ、ひいては我執強化にも繋がりがかねないという弊害を、危惧されたことかと拝察しております。それだけに、当組織の新たな節目時に際し、この陥穽への自戒を改めて共有しつつ臨むことこそ、その基本課題かと受け止めています。

次いで第二のテーマに関し、まず何よりも時代的状況を踏まえつつ臨む必要を、かねがね感じてきました。

とりわけ、高度情報化社会の加速化の反面、人と人との絆が希薄化し、既存の家族、学校、職場、地域といった共同体自体の機能不全が露呈化していることは、まきれもない実情であります。と同時に、この消息は若者男女を問わず、内なる空虚感、疎外感に支配され、自分探しや、ネオ、ネオミユニティ活動が胎動するといった動向と表裏の関係にもあるようです。

このような近代化に伴う人間疎外的な危機感を背景に、既に西欧社会では東洋の知恵に対する関心が高まりだしてきたことも事実です。その具体的実践法である内観への世界的注目も、この潮流と軌を一にしています。

と同時に、当会の方向性自体も、この時代に呼びかけに応じうる、新たな展開を促されてもいるようです。

此の点に関し、とりわけ今沖縄大会前夜におけるパネルディスカッション「若い視点で内観の将来を語る」は、まさにタイムリーでした。一方で、原法の基本に立ち返つての紹介とともに、次世代を荷う方々による既成枠に縛られない自由な発言は、大変示唆に富んでおりました。

当会の歩みは、従来いわゆる医学モデルに準拠しての研究取り組みが、主流だったようです。しかし、すでに内観医学会が別組織として機能してもいるだけに、本会としての独自のアイデンティティを改めて検証してゆく営みこそ、次なる課題ではないでしょうか。

その際、人間の救いを旨とし、病氣や困難の回復は、内観の随伴現象という旨の吉本師の指摘にこそ、其のヒントがこめられているように思われます。前述の今日的時代状況の背景には、人間復活に向けての根源的ともいえる要請が何れるだけに、「生病老死」に通底する内観法の原理は、まさにこの動向に適っているといっても過言ではありません。

ところで、当会は以前にも触れましたが、「学際的な集い」であると共に、「国際的な交流」に向けての気運の高まりという状況下にも置かれています。それだけに、様々な世代や文化といった異質な世界との相互触発のなかにこそ、まさに新たな道筋に向けての開拓力が潜在しているのではないでしようか。

そこで次に、この消息を踏まえつつ、具体的取り組みの一端にも触れてみたいと思います。まず、既に従来から取り組まれてきた「家族と内観」におけるキーパーソンへの内観導入を介し、家族全体の癒しを促すという観点のなかに、既にネオオミユニティ活動における先駆的モデル像を見出すことが出来るようです。

一方、とりわけ若年世代における自我機能不全ケースへの対応に関し、アプローチ上の工夫、更には研修所と医療機関との連携による相互協力体制の構築、ひいては共同研究に向けての取り組みも、今後のますます大切な課題かと思われまます。

更に、働き盛りのメンタルヘルズ活動にあつて、とりわけ産業界の指導的立場層の方々への導入は、当事者のみならず、組織自体の意識変革や再活性化にも貢献してゆくことが期待されます。なお、最後に中高年世代における様々な「喪失体験」時における、時宜を得ての内観導入は、まさに其の真髄發揮の契機でもあろうことを、申し添えたいと思います。

以上、吉本師の原点に立ち返り、今後の当会の在りようにつき、おもむくままにしたためさせていただきました。

第三十一回 日本内観学会大会レポート



瞑想の森内観研修所 清水 康弘

梅雨の長雨と沖縄の暑い日射しが交叉する空の下、第三十一回日本内観学会大会が、平成二十年六月六日(金)から六月八日(日)まで、三日間にわたって開催されました。

前回沖縄で日本内観学会大会が開催されたのは平成十一年ですから、九年ぶりの開催になります。空港からバスで一時間ほどの宜野湾市にある沖縄コンベンションセンターが会場でした。

今回は総合テーマに「美ら心内観」(ちゅらぐくるないかん)という沖縄の歴史と文化を感じる琉球語が使われていることに表されるように、シンポジウムの「黄金言葉(くがにくとうば)に見る内観のこころ」、特別講演の「沖縄のこころと内観」など、大会全体に底流のように流れる「沖縄」を感じました。

まず初日には、学会員のパネルディスカッション「若い視点で内観の将来を語る」がありました。大会長長田清先生(長田クリニック)のご挨拶の後、東睦広先生(近畿大学医学部精神科)と藤浪宏典先生(和歌山内観研修所)という若い進行役のお二人が紹介されました。お二人が生まれた昭和四十二年は内観三項目が成立した年でもあり、内観の歴史を感じました。お二人が高校時代の同級生であったためか、肩肘の張らないとても息の合った、それでいてお互いを尊重した進行ぶりに会場の空気は終始和んでいました。

パネリストに、高橋美保先生(東京大学大学院教育研究科博士課程)、古市厚志先生(富山大学医学部精神科)、真栄城さおり先生(Asian American Recovery Services, Inc. High School Counselor)を迎え、南達元先生(上海精神衛生中心・精神科医)がコメンテーターとなり、それぞれのお立場での内観に対する思

いをお話くださいました。

高橋先生は、内観の将来を自身の課題に投影し、他の療法との比較に見える内観の「ならでは」をお話下さいました。古市先生は、病室での集中内観の臨床経験から治療者として意識される点、①主訴をしっかりと聞く、②患者のペースに治療を合わせる、③理想像を持たない、という三点をお話されました。お話しの中の、「患者の人生の流れと治療の向きが逆にならないように」という言葉が印象的でした。真栄城先生は、ご自身のHIV関係のカウンセリングのご経験から、カウンセリングに向いてない人へのツールとしての内観の有効性、そして、どうやって内観をできるように導くかについての工夫をお話されました。それに対して南先生は、老荘・儒教・仏教などの思想を説明を交え、文化的な側面からのコメントをして下さいました。

フロアからは、百戦錬磨の先生方からの、「あなた達にとつての内観学会の魅力とは」「吉本先生に見られる面接者の人柄をどう考えるか」「内なる母との一体感について」などの、温かいながらも本質を突く質問に、若い人へ寄せる思いを強く感じました。

二日目の午後のシンポジウムは、テーマを「黄金言葉(くがにくとうば)に見る内観のこころ」として、中国から、また、内観関係者以外からのシンポジストもご参加いただき、手塚千鶴子先生(慶應義塾大学)を指定発言者に加え、開かれました。昨今中国では内観療法を取り入れる動きが活発になってきており、会場フロアにも、中国の医療関係者からご参加の方が二十三名もいらっしゃいました。

それに合わせて、シンポジストの先生が二〇分間話をしたものを、南達元先生が五分位に簡潔にまとめ中国語に訳す、これを繰り返すというスタイルでの進行となりました。

仲村将義先生(沖縄県立南風原高等学校)は、沖縄民謡の「ていんさぐの花」の歌詞に込められている「心を磨き、親を大事にし、誠意をもってあたりなさい」という教えを引用し、人が「子ども」から沖縄の理想とする「ちゅ(人)」となる条件である、①心理的離乳、②ギブアンドテイク、③自他肯定、④現実原則、は

内観によって培われると話されました。

中山勲先生(沖縄県教育委員・玉木病院院長)は、「モリー先生との火曜日」のモリー先生や芭蕉・良寛らを引用し、「実に居て虚に遊ぶべからず」という、小我を抑止し、真我・大我に目覚めること、すなわち「日本的靈性」に目覚めることの大切さ、またそれには内観が大きな役割を果たさうと話されました。

中国に内観療法を取り入れた第一人者である王祖承先生(上海交通大学医学部教授)は、数多くのスライドで中国の思想や格言を紹介しながら、宗教の面からも、哲学の面からも、内観が中国において非常に親和性の高いものであることをお話しされました。

三人の先生がお話しされた後は、シェアリングの時間が設けられ、フロア全員がシンポジストのお話について意見交換をしました。その後の質疑応答では、フロアからシンポジストに、「先生にとっての『黄金言葉』は？」や、「吉本伊信先生は、『人は内観をするために生きている』と言われるが、人は何のために生きていると思いますか？」、「先生にとっての『内観』とは？」などの質問があり、大いに盛り上がりました。

フロアのある中国の女性が、「今、中国は四川地震に遭い、多くの方が苦しんでいます。その人達に内観はどう助けますか？」と、切実なる思いを語られました。「どんな逆境にあっても、喜んで喜んで暮らせる心境に達する」という内観の必要性を強く感じる一コマでした。

長田清先生(長田クリニック)による大会長講演「癒しということ」は、笑いあり、涙あり、音楽あり、とても楽しい時間でした。儀式による癒しや、シャーマンが患者を治すこと、心理療法には絶対に効かない治療法も絶対に効く治療法もない、重要なのは患者の治癒への信仰心であり、また、患者自身のもつ強さ、資源、生活環境、まわりのサポートなどの治療外要因であることなど。そして、心を病んだり、不幸な出来事に遭遇したり、人生の荒波に呑み込まれそうになり溺れた時、魂の深淵からの声をきくためにするのが内観であり、内観者の力を信じて、その人自身の利用できるところを共に探していく工程のプロセスそのものが癒

しとなるという話が印象的でした。

その後は、施設内のレストラン「ラナイ」で懇親会が開かれました。中国からご参加のみなさんも出席され、沖縄の歌や踊りを交えた、とても和やかで楽しい会でした。

三日目の真栄城輝明先生(大和内観研修所)の特別講演「沖縄のころと内観」では、沖縄のうたを会場に流し、それを全員で大合唱をしました。大切なのは、目に見えるものではなく、目には見えない人を思いやるころ、相手をいたわるころ「肝心(ちむぐくる)」あること、そして、内観者の報告の言葉の中にも「沖縄のころ(肝心)」が表現されていることを話されました。

特別講演「子ども心の居場所」で村瀬嘉代子先生(北翔大学教授)は、昨今の子どもの精神の問題から、傷ついた子どもたちの深い悩みに立ち入ってみると、ごく自然な心に触れることができること、生きにくさを抱えている子どもも、人に認められ社会に役立ちたいという人間本来の願いは、今も昔も変わらないこと、そして、日々の営みの中で子ども心の居場所を創っていく援助が、大人のできることでありと話されました。鋭い洞察と深い見識に裏打ちされたお話は、会場を埋め尽くした聴衆を優しく魅了しました。

終わってみれば、若い力を感じ、中国の熱意を感じ、沖縄のころを感じ、すっかり内観人(ないかんちゅ)になった三日間で

最後に、今回大会開催を快く引き受けて下さり、事務局として企画・宣伝等の準備に八面六臂の活躍をされていた沖縄内観研修所の平山一義先生が、大会直前の五月に癌のため逝去されました。先生は最期まで、大会が成功するようお心を砕き、そして、奥様の恵美子先生に、自分が亡くなっても研修所を続け内観普及に務めるようにと伝え、旅立たれたそうです。内観にとってとても大きな柱の一つが失われてしまいました。いつまでも我々を温かく見守って下さっていることと思います。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

パネルディスカッションに参加して



カウンセラー 眞榮城さおり

私は米国の公立高校で、主に薬物使用問題にさらされている高校生を対象にしたスクールカウンセリングを職業としております。内観に出合ったのは欧米で唱えられている数々の心理モデルに、ある限界を感じた時でした。早速、集中内観を体験させて頂いて、これは自己治療力に基づいた素晴らしい心理療法であると認識し更に深く知りたいと思い始めました。

今回「内観の将来を考える」ということで若手だけでパネルディスカッションをするのでパネラーをやってみないかとお誘いがありました。新参者の向こう見ずさでなんとなくお受けしてしまいました。よく考えてみると自分は、他のパネラーの方々とあまりにも経験の差があり過ぎるので「しまった」と頭を抱えました。しかしながら、今回の体験を通じて得たものも多く、私なりの印象を少々述べさせて頂きたいと思えます。

私が会場に着いてまず初めに感じたことは、この学会を支えている方々のいき届いた気配りでした。私自身、非営利団体で長い間働いておりましたので、こういったイベントを主催することがどれ程大変なのかを良く理解しているつもりです。米国で様々な学会に参加した経験を思い起こしてみても、やはりここは日本の内観学会であるせいか、学会を成功させようと陰となり日向となつて、働いていらつしやる方々の「内観的」心遣いを感じました。これはこの大会の総合テーマでもある「美ら心（ちゅらぐくる）内観」にもつながるのではないかと思います。又今回の滞在を通じて、本当にこの沖縄という島が「美しい（ちゅらぐくる）内観」の表れであり、思いやり、気配りの文化に基づいていると、強く確信した次第です。沖縄の悲惨な歴史を考えた

時、苦悩や困難を体験し、人生の陰の部分にくぐり抜けて来たからこそ、回りの人に優しく出来る、常に感謝の心を持って接することが出来る、というような内観的思想が定着しているのではないかと思います。それはシンポジウムの「黄金言葉に見る内観のこころ」で手塚千鶴子先生のご発言「内観の大切さは自分の中の闇と向き合うこと」にも反映されていました。

今回学会に参加させて頂いて、自分の中でハッキリしたことがあります。今まで自分は内観に向いている生徒を見極めては、記述式内観のようなことをして、生徒に受け入れられるかどうか試してきました。そしてまだ内観というものが未知である生徒にとつては「受け入れられぬのではないか」という不安が常に先走っておりまして。しかし、やはり内観は、内観が出来ていない生徒にこそ試みるものであるということに気がつきました。集中内観のような訳にはいきませんが、記述式の間を短くして行くことによつて、だんだん生徒も内観に入りやすくなるかもしれません。サイコセラピーと併用することを積極的に続けていけば、初めは自分の「闇」と向き合えなかった生徒も、そのうち向き合えるかもしれない。そして内観を継続していくことが、これからの自分にも生徒にも必要であると改めて悟ることが出来ました。

今後、私がアメリカで内観を続けて行くには、かなりの根気と努力が必要で、内観が苦手だった生徒が内観出来るようになって初めて「私はアメリカで内観をやっています」と言えるようになるのではないかと思います。そしてスクールカウンセラーをやつて行く中で大切だと思うことは、村瀬喜代子先生のお言葉通り「生かされていない生徒の可能性を見つけてあげること」だと思えました。生徒自身が今の自分の在り方を見詰めることが出来、こころの居場所感覚を取り戻すことが出来れば、自分の可能性についても考えていけるのではないかと感じます。そのために内観が活用出来れば本当に素晴らしいことだと思います。そういった意味では、まだまだこれから先は長い、という重い気持ちにもなりますが、自分なりに努力して頑張つて行きたいと考えている次第です。どうも有難うございました。

第19回

内観ワークショップ in 奈良に参加して



三和中央病院 精神保健福祉士 山口 若子

平成19年10月27日・28日の両日、奈良市男女共同参画センター「あすなろ」にて、第19回内観ワークショップが開催された。全国各地からたくさんの方が参加され、先生方の顔ぶれも豪華にそろい、お久しぶりです、お元気ですか?の言葉と笑顔が交わされる和やかな雰囲気の中で、会が進行していった。

初日の青木省三先生の講演は、「思春期のころを考える」と題して、価値観が多様化し、情報や繋がりが重要視される中で、人との緊密な関わりがもたず孤獨を感じてしまう現代の子どもたちの自己像、将来像を如何にして肯定的なものに変えていくか。その変化の過程において、「本当に悩むべきものをつかり悩む、しっかりと考える」ことのできるのが内観療法である、と思春期の揺れるころに対応する内観の意義について、事例をあげながらわかりやすく話していただいた。

内観講話では、沖縄県立精和病院精神科の宮川先生より、2回の内観体験と、四国遍路、内観の臨床について、ご自身の実体験を詳しく伺うことができた。その後、内観実習の入門コース・討論会の応用コース・事例検討の専門コースに分かれての分科会が行われた。私が参加した応用コースでは、教育、医療、心理、矯正の各分野の専門の先生方がパネリストとなり、それぞれの立場、実践での経験からの「教育問題」が述べられた。それぞれの先生方のお話を聞いていると、みる視点も異なっても、その対象となるのは同じ人間、対象の同じ部分を見るのであり、人間の心の乾き、欠落、揺れやゆがみが様々な問題に顕在化し、発展していくことを理解した。内観で自分に敏感になり、根を知ることが大事、自分の考えの表現の仕方や思考方法を日常生活の中で実践する、ソーシャルスキルを

学ぶためにも、内観によって人間の中にある真実に近づくことを実感することが大切である、というお話の内容に深く共感を覚えた。

シンポジウムでは、大会のテーマでもある「混迷する時代をどう生きるか」について、精神医学、ヨーガ、キリスト教、仏教のそれぞれ先生方から、各立場からの内観の真髄といえるお話を伺うことができた。各分野のスペシャリストの先生方を前に、会場から「あの世はあるのでしょうか?」という究極の問いかけもあり、ゾクゾクするほど興味深く楽しいシンポジウムとなった。輪廻転生、Here and Now、誕生と死、時間と空間が垂直に交わる今、ここ……。問いかけに対する先生方のお答えのキーワードが不思議と同じ意味を示していることに驚きつつ、でも自然と心に響いて、当たり前のごとくのようにも思えてきた。精神意識の東西の対話が深いところにおいて一致する感覚と共に、その分野を極めた諸先生方の壮大な世界観、人生観に触れることができた貴重な時間となった。薬師寺管主安田映胤先生の招待講演では、「まほろばを求めて」と題して、世界的な視野からの広い見聞と深いご経験に裏付けされた「まほろば」の心、「まほろば」の国についてのお話を伺った。美しく尊く、懐かしい、理想のところ、中心となるところ、大和の国、日本。ここ奈良の大和から始まった内観、そしてこの奈良での大会にふさわしい、まさに「まほろば」の講演であった。

今回のワークショップは、様々な先生方の講演も、お一人の先生の講演だけでも拝聴したいすばらしい内容であった。そして、全国からの参加者を暖かくむかえてくださった、スタッフの方々のおもてなしの心に改めて感謝の意を述べたい。特に、懇親会での先生方、奥様、スタッフの方々による歌、踊り、楽器演奏などなど、深く胸を打たれた。来年は、当院のスタッフが実行委員となり、長崎でのワークショップが開催される予定であるが、この奈良大会の懇親会に出席して、当院からの参加者全員が、そわそわとあせりだした。なんと、まあ、すばらしい! さあ私たちは全国の参加者の皆さんをどのように歓迎しよう! あれでもない、いや、これはどうか、と皆さんを迎える内容や出し物について活発に意見を出し合いながら、頭も心も両手にもいっぱいのお土産を頂き、奈良の地を後にした。

留学生と内観、そしてそれから



慶應義塾大学 手塚 千鶴子

私は、大学で日本人と留学生一緒の英語をもちいた授業で、「異文化コミュニケーション」や「日本人の心理学」を担当しながら、日本語や英語で日本人大学生、留学生双方のカウンセリングも行っている。ここ二十年強の間に、留学生も多様化しさまざまな目的をもって日本にやってくる。かつての日本人に留学は、憧れの欧米圏への留学であったが、今や日本にそれ以上の激しい、こちらが一瞬恥ずかしくなるほど日本や日本文化に憧れを抱いて来日する学生達がいる。学部や院での学位取得が目的でなく、むしろ自分探しの要素の濃い、一年程度の日本語や、日本文化の勉強にくる学生達である。彼らの多くは、日本の漫画、アニメ、テレビゲーム、小説、日本独特の「かわいい」あるいは「おたく」文化の海外での進出とその人気に後押しされてやってくる。

そうした学生達に、「日本人の心理学：対人葛藤」の授業のなかで、日本で生まれたカウンセリングや自己内省法として内観を紹介し、ミニ内観をやってもらってきた経験から、留学生の内観や日本の文化への想いを中心に語ってみたい。

二十年前に授業で内観の話をする、そのほとんどの学生達は、主として欧米圏からであったが、とても否定的である。自分が他人からかけられた迷惑も沢山あるはずなのに、それを取り上げないのは、まったくもってけしからんアンフェアである。それに長い時間しゃべれないのは困るし、耐えられない。また内観のめざす「素直」を、故村瀬孝雄先生の英語の論文から引用したりして必死で説明するのだが、こちらの英語力不足もあるのである、その意味が正しく伝わらず、これまた批判ばかりである。いはく、自分の国ではそういう人は、むしろ「弱い人」や「自分できちんと思えられない人」として軽蔑さ

れ、うまく人に利用されてしまう。いはく、「素直」な人には、ものごとに対しての批判的思考ができるのだからかといった直球コメントが多かった。素直さや、和を大切にす文化と、個性のある人と人との葛藤はあたりまえ、オープンに議論でやりあうのがよいとする対決志向の文化との差は大きかったのである。

しかし最近の学生達は、国籍も欧米から東南アジア、オーストラリアなど多くの地域にまたがり、なおかつ、国際結婚で生まれた子弟達、親が移民や難民として別の国、文化にわたり、そこで生まれ育ち、教育をうけた子弟達、また日本国籍だが、ずっと海外でそだった日本人学生達、いわば多くの文化を体験してきた人達が多い。彼らからは真向こうからの批判よりは、むしろそういうやり方も面白いかもしれないという、はじめから内観体験に開かれている気持がある。そこでざっと、内観の歴史、特徴、やり方、どのようにして内観が効果をあげるのかなどの説明をし、教室で、十五分ほど、一人静かに座ってもらい、幼少期のある時期を選んでお母さんのことや、母親代理の人に「して頂いたこと」「して返したこと」「ご迷惑をおかけしたこと」のテーマをめぐり、いわば記録内観を体験してもらおう。時に教室の電気を暗くしたり、内観に入る前に、短いラックスできる導入部をつくることもあるが、普通の集中内観をするときのような静けさや集中は難しい。にもかかわらず、なかなか面白いことが起こる。

今学期は、内観の後、その時の体験や感じたことを絵に書いてもらい、グループで絵を交換し言葉で、感想をいいあってもらった。そのうえで、内観への思いや疑問をクラスで議論し、さらにレポートに書かせる。このように短いミニ内観体験を多様なツールを用いて授業でとりあげると、彼らの考えも深まっていく。一人の学生は、母に幼いときしてもらった数々の素晴らしいことを思いだし、素敵な線画で、あたたかな家庭の賑わいが聞こえてきそうな暖炉のある家と、そこに立つ大きな木と、花々に囲まれたお庭を描き、レポートにも母への感謝が素直にあらわされていた。またある学生は、父と別れて自分達兄弟を置いて出て行くとうとトランク片手に、タクシーに乗り込む淋しげな母、それを送る後姿の自分を描いていた。後者の絵には、胸をつかされたが、表情のよみとれない後姿にもかかわらず、母と同じく淋しげ

を感じながらも辛い現実をうけとめ乗り越えようとする静かな意思が伝わってきいてきた。その後のテーマの絵には、あかるい暖かな雰囲気気がよみとれた。

ここでも留学生からの批判のひとつは、虐待など自分に現実に迷惑をかけた人達がいたはずなのに、そういう人達に対しても、「迷惑をかけたこと」はとりあげても、「迷惑をかけたこと」をとりあげないのは、依然として不公正であり、彼らに正義がなされるべきであり、納得がいけないという意見もかなりある。そしてレポートに自分の親との葛藤を赤裸々に書き、今も理解しようとしているが許せないという気持をつづる留学生もいる。興味深いのは、そうした葛藤をレポートで自己開示することには、日本人学生以上にとても素直で、隠したり恥ずかしがる様子が見えないことである。そうした学生は、いはば自らの葛藤に直面できる強さがあるからなのか、次の別のテーマをめぐるレポートで、さらに深い気づきにたどりつくことが多いのには感動させられる。

いずれにしても、今まで母親の気持になつて考えてみたことのない多くの学生にとり、このミニ内観体験は、新鮮な驚きの体験で、いはば母とのきずなを再確認し感謝する学生、また「して頂いたこと」は沢山思い出しても「して返したこと」が思いだせず、落ち込む学生や、自分自身の自己中心性に気づき、母親に実際手紙をかくような学生もあらわれる。が依然として学生達の心配の一つは、すでに抑うつ的な人に対しては、内観ではさらに自罰的、自責的になる可能性が高いのではという、もつともな指摘である。逆に見ると、この私の授業をとる学生達には、日本人に近い繊細で、遠慮がちでシャイな、どちらかというと言責傾向の強い、本国の文化にはむしろびつたりこない学生も多いといえる。

内観それ自身とは違うのだが、学生の反応で面白いのは、「鶴の恩返し」の日本の民話をグリムの「蛙の王様」の話と比較して授業で取り上げたときである。多くの留学生が、なぜ、鶴女房は、「見るな」という約束を破った夫に対し、ひとことも責めたり怒らず、ただ悲しいと消えてしまふのかという疑問を感じる。全然鶴女房の気持がわからない、自分ならものすごく「怒る」のにとりてそうだと

だと留学生達が賛同したことがあった。その時、その勢いに押されながらも、ある日本人男子学生が、立ち上がり発言した。この「鶴の恩返し」で、鶴女房が怒らずに静かに、立ち去るからこそこの話は素晴らしい、美しいのだと。一瞬シーンとなった時、この意見にどう思いますかと問いかけると、いつも静かなあるカリブ海の国からの男子留学生が手をあげた。「僕も彼のいうことが分かる気がする。去つていくからこそ美しいのです。」このことに関しては、故河合貞雄先生が、鶴女房がたちさることで、そのものあわれの感覚がかもしたされていると指摘しておられる。こうした学生達は、ある意味で、私達が思っている以上に、日本の文化の本質を理解しようのではないのかと思う。

昨今内観は、欧米や中国、韓国、アメリカなどさまざまな国に少しづつ発展しているが、それはとても喜ばしいことである、私自身の授業での試行錯誤でのミニ内観体験の実施の経験から考えても、ますます、日本にやつてくる留学生で興味をもつ学生達に対しては、日本にきた甲斐があるような内観体験を提供できるように工夫を重ねて生きたいと考えている。

「第11回日本内観医学会」のご案内

期日：平成20年10月3日(金)～4日(土)

会長：竹元 隆洋(指宿竹元病院)

会場：鹿児島県市町村自治会館(県庁前)

テーマ：内観療法の特性と有効性

参加費：会 員 5,000円

非会員 5,000円

学 生 2,000円

【申し込み・問い合わせ先】

第11回日本内観医学会事務局

指宿竹元病院

〒891-0304

鹿児島県指宿市東方7531

TEL:0993-23-2311

FAX:0993-23-2518

第二十二回

内観療法ワークショップ開催のご案内

このたび、左記の内容で第二十二回内観療法ワークショップを開催いたします。

長崎市においては初めてのワークショップです。どうぞ皆様方のご参加を心よりお待ちしております。

日程…平成二〇年十一月一日(土)～二日(日)

会場…活水女子大学：長崎県長崎市東山手町一の五十五
大会テーマ…「恢復する力」内観で生れるこころ

— プログラム —

第一日目

【基調講演】「内観するということ」

講師…池上吉彦氏

【教育講演】「内観療法入門」

講師…三木善彦氏

シンポジウム

【内観による恢復とは】

講師…高口憲章氏、堀井茂男氏、清水康弘氏、岡俊郎氏

第二日目

【特別講演】

「内観療法の適応と効果」 講師…竹元隆洋氏

【招待講演】

「遠藤周作と長崎」 遠藤文学 その母なるもの 講師…奥野政元氏

内観体験発表

二名の方

事務局…三和中央病院(塚崎 稔、馬場 博)

長崎市布巻町一六五の一

TEL 095-898-7511

E-mail info@sanwa.or.jp

広報編集委員

塚崎 稔 (三和中央病院)

木村 秀子 (米子内観研修所)

本山 陽一 (白金台内観研修所)

原稿の送り先

〒108-0071 東京都港区白金台3-13-18 白金台内観研修所

TEL 03-5447-2705

FAX 03-5447-2706

E-mail zan25224@nifty.com

第三十二回日本内観学会奈良大会のお知らせ

同大会実行委員長 真栄城 輝明

日程…平成二十一年六月十九日(金) 二十一日(日)

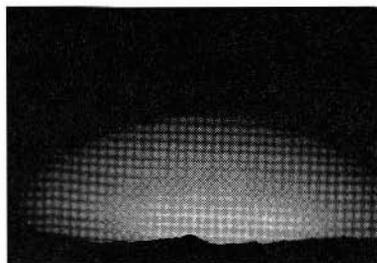
会場…奈良市ならまちセンター

テーマ…内観の空に“かぎろい”を迎えて

申込み…大和内観研修所

TEL 〇七四三-五二二-二五七九

e-mail: naikan3@nifty.com



このたび日本内観学会の第三十二回大会を奈良で開催する運びとなりました。当地奈良は、内観の発祥地として知られており、二〇〇七年十月には第十九回内観療法ワークショップを開催致しましたところ、全国各地より多くの方々のご参加くださってワークショップを盛り上げていただきました。改めて、ここに御礼申し上げます。

そのときの余韻が冷めない内に実行委員会が組織され、大会準備に取り組んで参りました。そして、実行委員会には不躰を承知で吉本伊信が敬愛してやまなかった国民的人気歌手の島倉千代子さんに記念講演の依頼状を差上げたところ、ご快諾いただきました。さらに、特別講演には世界的にも高名な、我が国を代表する精神分析家・西岡昌久博士をお招きすることになりました。

まさに、内観発祥の地に“かぎろい”を迎えることになったわけです。当日は、ひとりでも多くの学会員にご参加いただきたいことは言うまでもないことですが、学会員以外の方々にも内観への理解を深めるべく、ご出席いただきますようご案内申し上げます。次第です。

(写真…奈良県大宇陀町から望む“かぎろい”の空【宇陀市HPより】)